

千歳山の整備について

千歳山は、第16代川喜田久太夫（川喜田半泥子）の創作の地として、また、藤堂藩ゆかりの地として歴史深い地であるとともに、市街地にまとまって緑が残された貴重な地でもあります。

その深き歴史の面影と豊かな自然は、川喜田家によって代々引き継がれ、長きにわたって守り抜かれてきました。

このような中、平成20年2月5日に川喜田家から千歳山の寄附の申し出があったことから、直ちに寄附を受けるものと将来寄附されるもの（寄附予定物件）とを明らかにし、平成20年3月の津市議会定例会で受納が議決されました。

このため、まず平成20年度にスタートした津市総合計画に、千歳山を市街地に貴重な緑が残された公園として整備し活用することを位置付けました。

そこで、具体的な整備に向けた意見を広く聴くため、平成20年11月4日に設置した「津市千歳山を考える会」において、平成23年1月までに10回の会議をはじめ先進地視察等が行われ、貴重な自然の保全と半泥子が生活していた往時の空間を感じる整備が必要であるとの意見を頂きました。

さらに、より多くの市民から直接意見をお聴きする機会として、千歳山において市民現地視察会を平成20年11月30日と平成22年11月21日に開催し、合わせて約150名の方の参加を得、意見等を伺いました。

また、寄附予定物件に関しては、平成25年3月25日に川喜田家相続人からの始期付き贈与契約の申し出を受け、平成25年5月1日に公正証書にて本贈与契約を締結するとともに、平成25年5月10日に法務局における同契約に係る始期付き所有権移転の登記が完了しました。

こうしたことから、平成20年4月1日に受納したところの整備を第1段階とし、寄附予定物件に係る部分も含めて、千歳山の全体の整備を進めます。

図 始期付き贈与契約に係る贈与物件



■千歳山の現況

○千歳山の地理

千歳山は、津市の中心市街地から南へ約2kmのところに位置し、周りは住宅地で囲まれ、西側にはウォーキングや野鳥の観察を楽しむ方などに親しまれる岩田池公園があります。

千歳山の起伏量は約35mあり、最高標高地点は、南西側稜線地にある標高約45mの2つの小山となっており、30度から40度を超える傾斜部分も存在しています。また、樹高20mを超える高木が多数存在するため、山全体のボリューム感が大きく感じられます。

最寄りの公共交通機関としては、JR線（紀勢本線）の阿漕駅と近鉄名古屋線の南が丘駅の2つの鉄道駅があるほか、北側の県道にはバス停「青谷口」が、東側の市道にはバス停「千歳ヶ丘」があります。

図 千歳山の周辺概要図

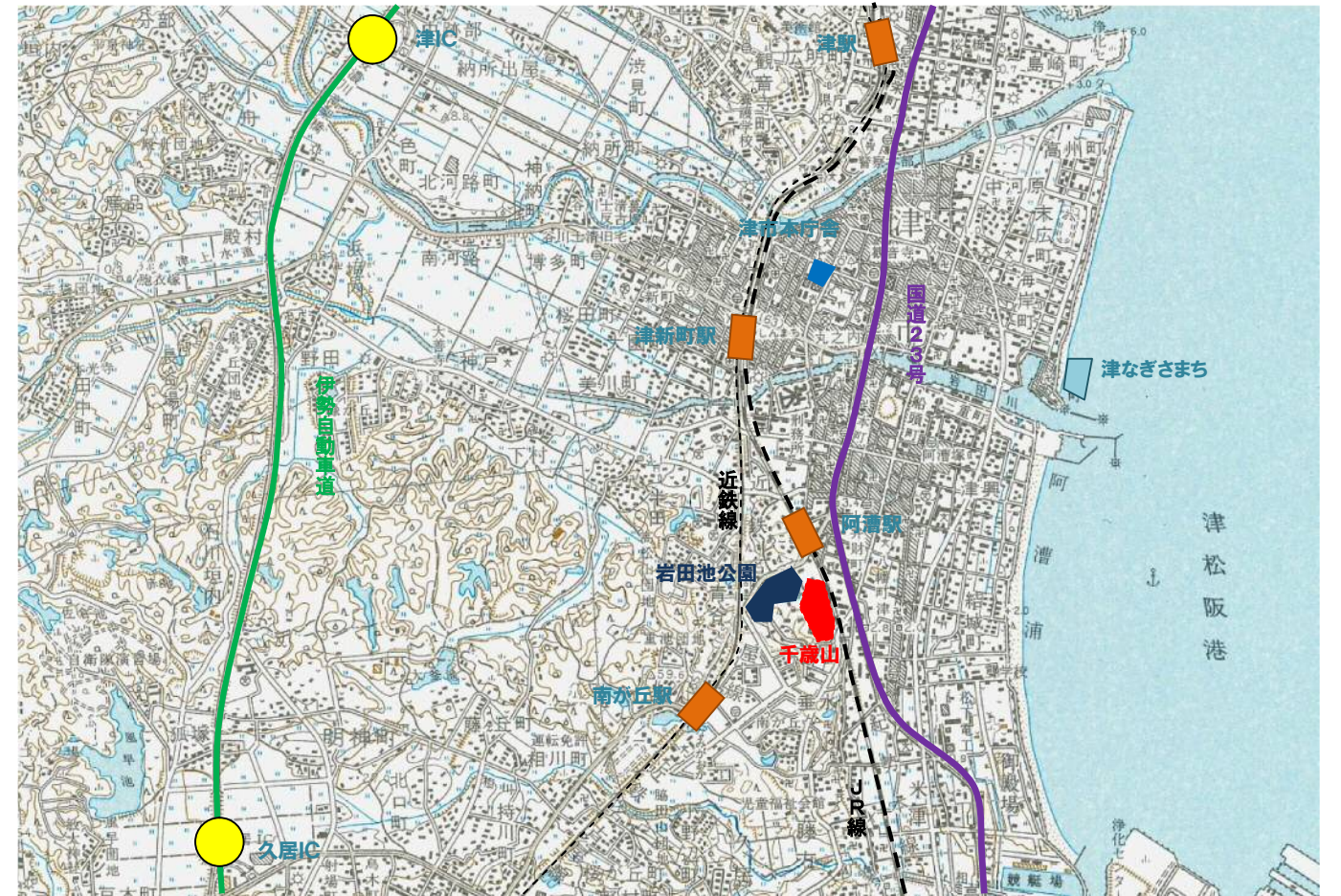


図 現在の千歳山の航空写真

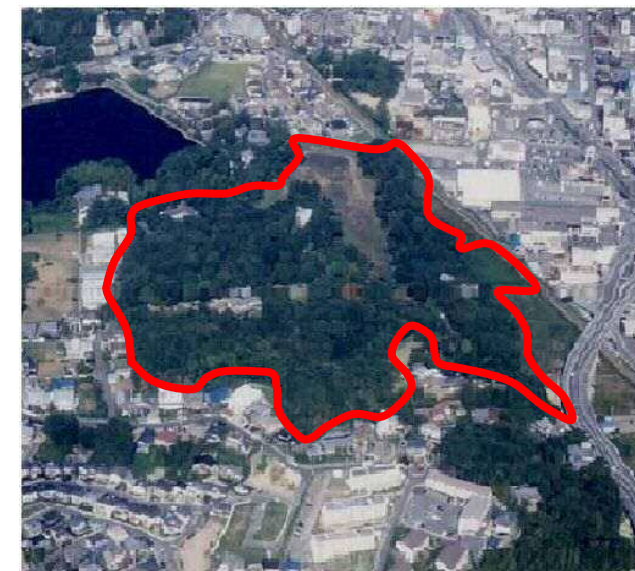
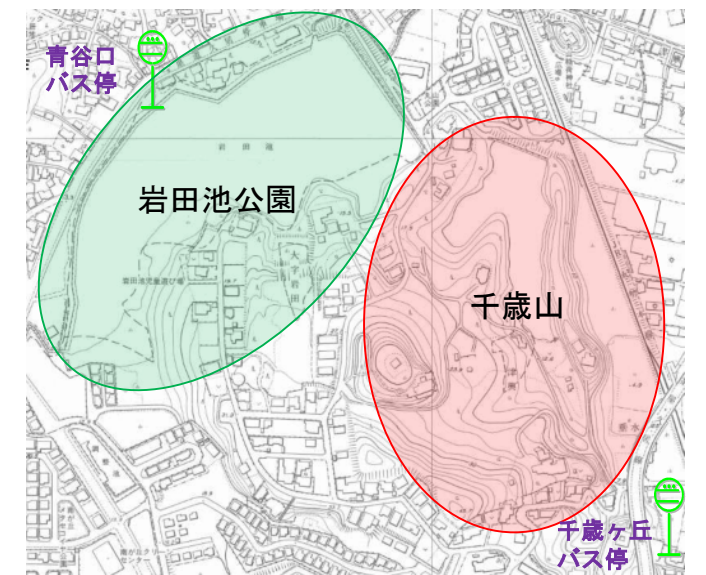


図 千歳山の周辺概要図



(■千歳山の現況のつづき)

○土地及び工作物等

今回整備する千歳山の区域は、下図「工作物等の配置図」の点線で囲まれた範囲を基本とし、千歳池を含めるとその面積は、約74,000㎡あり、過半は山林となっています。

川喜田家から受納した物件は、下図点線内と概ね同範囲とする土地（28筆、面積：約54,000㎡）及び当該土地に存する家屋（アトリエ、旧宅、表門（正門）・門小屋）並びに日時計をはじめとする工作物です。

千歳池（面積：約11,000㎡）は、以前から津市所有であるほか、石水博物館並びに千歳文庫及び同文庫底地（面積：約5,000㎡）は、今後も（公財）石水博物館が所有・管理するもので、同博物館の底地は、寄附の条件により、津市が期限付きで（公財）石水博物館に無償貸与しています。

なお、下図のとおり千歳山の出入口は4箇所あり、このうち車が通行できるのは、表門（正門）、西口及び南口の3箇所、東側にある1箇所は、人が通行できるくらいのトンネルとなっています。

図 工作物等の配置図

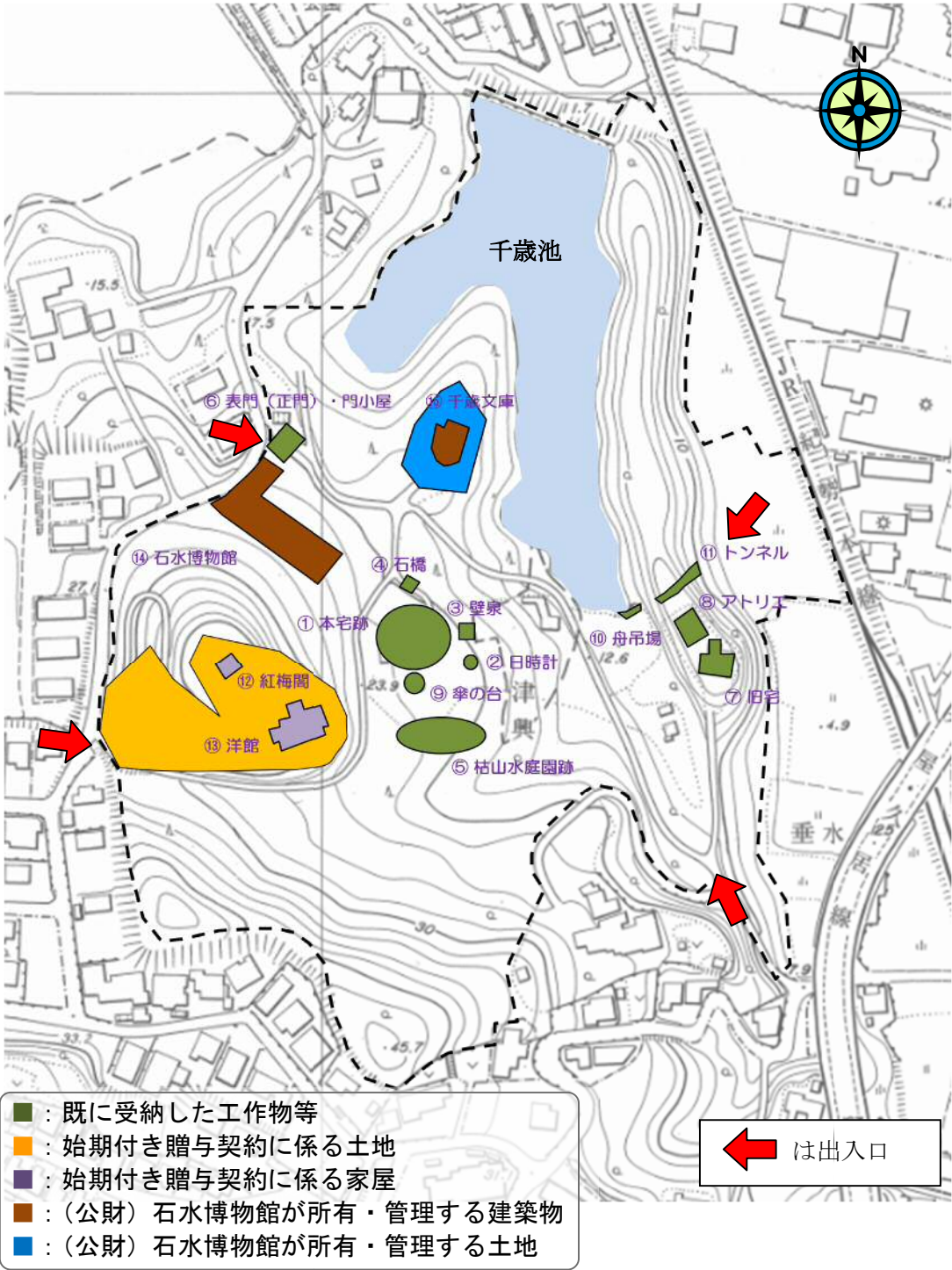


表 千歳山の土地の状況

区 分	面 積
平成20年4月1日に受納した土地	約54,000㎡
寄附予定物件に係る土地（始期付き贈与契約に係る土地）	約4,000㎡
（公財）石水博物館が所有している土地	約5,000㎡
千歳池（以前より津市所有）	約11,000㎡
全 体	約74,000㎡

表 主な工作物等の概要

名称	概要等
①本宅跡	本宅は、大正2年頃に建設され、木造2階建洋館と木造平屋建和館からなり、設計者は、著名な建築家である大江新太郎氏である。昭和18年（1943年）に鈴鹿海軍工廠の貴賓室として使用するため移築され、現在は解体された部材が奈良県にある民間に保管されている。本宅の敷地内には、ロータリーや人力車置き場兼車夫控所跡のほか次の②～⑤の工作物等が残されている。
②日時計	半泥子と半泥子の長男である壮太郎氏が大正12年（1923年）に初めて世界一周旅行をした記念として、大正14年（1925年）に設置された。
③壁泉	日時計の北側の洋風庭園の一角に設置されたレンガ造の壁泉で、陶製の像から水盤に湧水を注ぐ構成となっているが、現在は破損している。
④石橋	表門（正門）から当時の邸宅の玄関にいたるアプローチの間の沢部に架けられた石橋で、脚部は堅牢な切り石のアーチ造り、頭部は板状のコバ積み美しい構成となっている。
⑤枯山水庭園跡	和風庭園として作られた枯山水で、井筒、灯籠、石組、橋などが残っており、庭園跡にある石には、半泥子の「秋風の ふくよろくの まわるまま」という句と自画像が刻まれている。本宅との一連の整備によるものが基本となり、これに後年の整備が加わっているものとみられる。
⑥表門（正門）・門小屋	表門（正門）と門小屋が一体となった木造瓦葺建物で、この門には、戦後進駐軍のジープが接触した傷が残っているほか、当時、門番として、身長2mを超すインド人を雇い、訪れた人が驚く様子を半泥子が楽しんでたエピソードがある。
⑦旧宅	壮太郎氏により純粋な私邸として建設された。木々に囲まれて静かな佇まいをしているが、建物の老朽化が著しい。
⑧アトリエ	壮太郎氏のアトリエとして昭和46年（1971年）に建てられ、山小屋風の造りとなっている。当初は1階が倉庫、2階がアトリエとなっていたが、その後改築され居宅として利用された。
⑨傘の台	本宅の撤去後、跡地が寂しいということで、壮太郎氏により設置された。
⑩舟吊場	壮太郎氏が舟遊びの際に使用した舟吊場で、舟吊機は破損している。脇の通路を支える建造物は上部の池の堤体でもあり、越流口が設けられている。
⑪トンネル	JR線（紀勢本線）沿いにあった耕作地への往来に使用されていたトンネルで、コンクリート現場打擁壁の上にコンクリートブロックによるアーチが架けられている。現在も通り抜けることができるが、構造的には耐震性の基準を満たしていない。
⑫紅梅閣	当該建築物は、始期付き贈与契約に係る贈与物件で、半泥子が祖母（政）のために建て、祖母が好んだ梅にちなんで「紅梅閣」と名付けられた。建築物の中には、六朝時代（約222～589年）の石仏等の文化的資産があり、壁と天井は地元画家である奥田竹石が描いた梅があしらわれている。平成19年に修理済である。
⑬洋館	当該建築物は、始期付き贈与契約に係る贈与物件で、半泥子の孫である貞久氏が住まいとしていた洋風の居宅で、伊勢湾を一望できる高台に建てられている。
⑭石水博物館	当該建築物は、（公財）石水博物館が所有し管理する物件で、平成22年3月に建設され、翌年5月10日に開館された。同博物館では、半泥子の作品をはじめとした収蔵資料が一般公開されている。
⑮千歳文庫	当該建築物は、（公財）石水博物館が所有し管理する物件である。川喜田家の所蔵品を収蔵するために、昭和5年（1930年）に建築されたレンガ造り風の鉄筋コンクリート4階建で、平成18年3月2日に国の登録有形文化財に登録されている。平成21年には、外観の修理と耐震工事も施され、現在も収蔵庫としての機能を果たしている。

■整備の在り方

○整備の方向

千歳山には、市街地に広がる貴重な自然と、半泥子の生活や創作活動を感じることができる空間が残されています。この魅力を最大限に活かし、子どもから大人までが有意義な時間を過ごすことができるよう、残された貴重な自然を保全するとともに、現存する工作物等の保存や利活用を図り、半泥子が過ごした往時を感じる公園として整備を進めます。

そして、自然に触れられる環境や半泥子にまつわる工作物が残された空間など、それぞれの特色や強みを活かし千歳山の魅力を最大限に引き出すため、右図のように「水辺空間を活かしたゾーン」、「歴史的な工作物を活かしたゾーン」、「豊かな自然を保全するゾーン」の3つのゾーンに分類し整備を行います。

さらに、千歳山には、地域住民の健康増進とともに自然保護を図ることを目的として整備している岩田池公園が隣接していることから、岩田池公園と千歳山がそれぞれの個性を保ちながら、連携して楽しめるような整備を進め、アクセス整備に関しては、近隣住民の生活に配慮するとともに公園を訪れる方の利便性を考慮した駐車場や進入路を整備します。

また、整備に当たっては、千歳山に存する樹木が暴風等によって倒れ隣接する民有地に影響を及ぼさないよう、まずは境界付近の樹木の伐採等により緩衝帯を設け、近隣住民の更なる安全・安心を確保するとともに、大人や子ども、体の不自由な方、お年寄りや妊娠している方など、多くの方々に千歳山を快適に楽しんでもらうため、ユニバーサルデザインなどにも配慮します。

水辺空間を活かしたゾーン

千歳山の北側周辺は、千歳池を中心とした豊かな水辺空間があることから、これを活かしたゾーンを形成します。

このため、景観に配慮した水辺空間の保全と活用を図ります。

歴史的な工作物を活かしたゾーン

千歳山の中央部分には、本宅跡や千歳文庫など歴史的な工作物等が数多く残っていることから、これらを活かしたゾーンを形成します。

このため、半泥子が実際に生活していた往時の千歳山が感じられるよう現存する工作物等を最大限に活かした公園整備を行います。

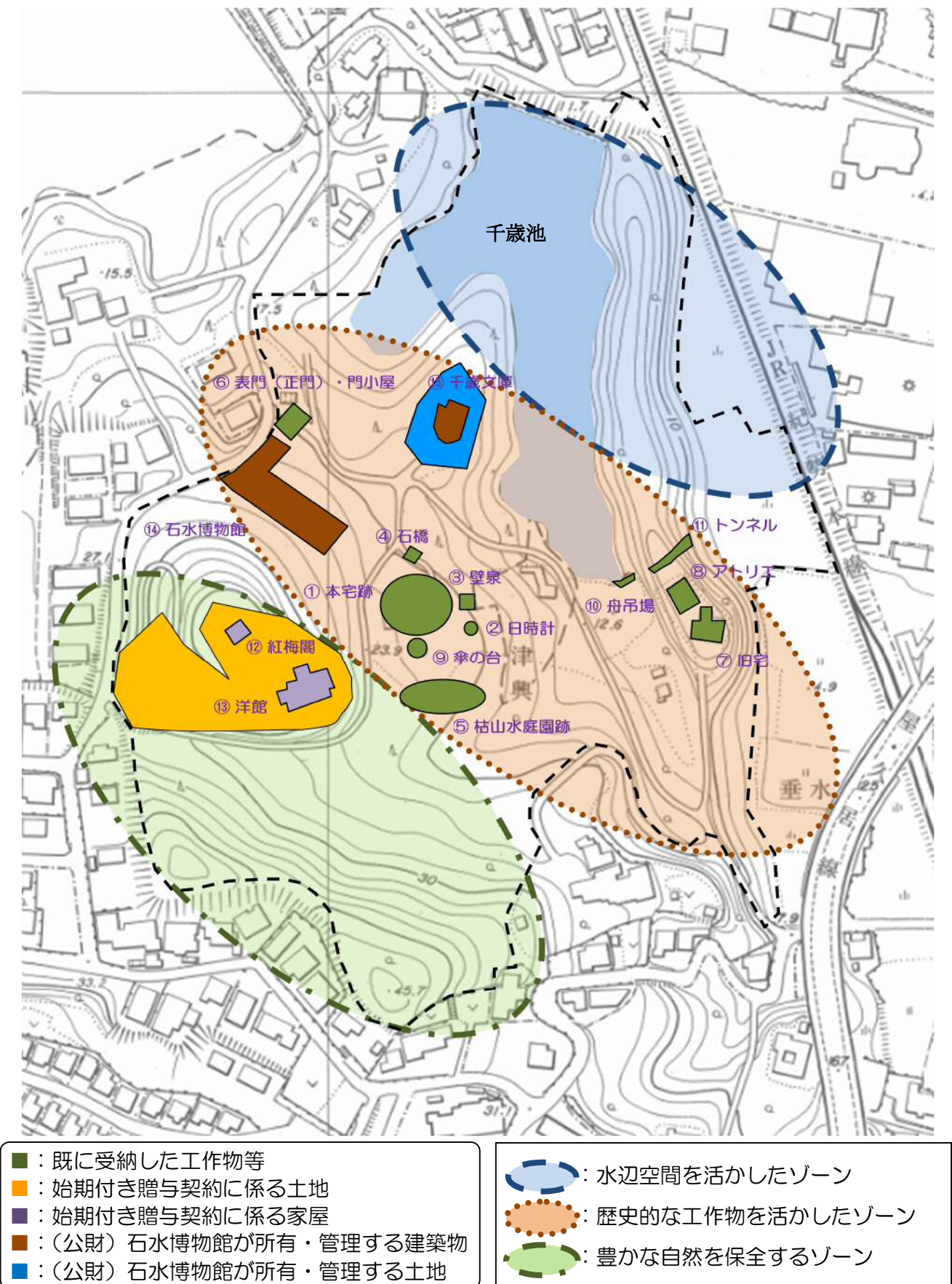
また、当該ゾーンにある石水博物館と連携し、文化や芸術に触れることができる公園としての魅力の創出と活用を図ります。

豊かな自然を保全するゾーン

千歳山の南側周辺は、巨木や照葉樹を中心とする豊かな自然が残っていることから、間伐などによる適切な管理のもと、人の手を加えることを最小限にとどめ、人の立ち入りを制限することなどにより、市街地に残された貴重な自然を保全するゾーンを形成します。

なお、当該ゾーンにある寄附予定物件については、受納後、半泥子の思いを伝えるものとして人の手を加えることを最小限にとどめた保存、活用を図り、特に洋館については、食などを提供する施設としての活用が考えられます。

図 千歳山の整備に係るゾーニング

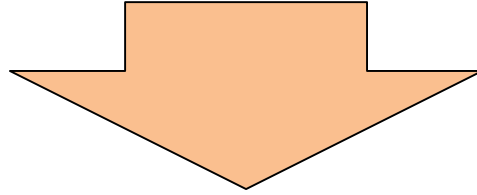


（■整備の在り方のつづき）

○整備の進め方（平成26年度～平成32年度）

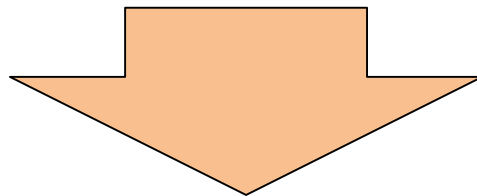
基本計画の作成

この「千歳山の整備について」を踏まえ、敷地の立地条件等を分析評価し、空間構成や動線など公園の基本的な内容を決定する基本計画を作成します。



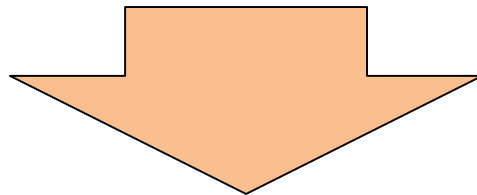
基本設計の作成

基本計画に基づき、実施設計に向けて、公園等の骨格となる施設配置、諸施設の形状、基盤施設、植栽等について概略の設計を行う基本設計を行います。



実施設計の作成

基本設計において定めた指針及び骨格となる施設配置等に基づき、安全性や機能性、デザイン性等といった面からの詳細な検討を行い、工事の内容が十分に把握できる実施設計を行います。



工事着手

実施設計に基づき工事を開始し、「歴史的な工作物を活かしたゾーン」から優先的に整備を進め、可能なところから順次公開していくこととします。